

平成 29 年度 財団せせらぎ 助成金使用報告書

所属	国立看護大学校 (応募当時)	職名	助教 (応募当時)	助成金額	300,000 円
氏名	加賀田 聡子 印				
研究や活動等のテーマ (申請書に記入した内容を記入すること。)					
社会参加が豊かな地域に住む高齢者は日常生活活動能力が高いか：大規模縦断調査					
助成金の使用実績の概要 (日本語で記入すること。図・グラフ等の記載は必須ではない。)					
<p>【目的】社会的な繋がりやグループに加わることによって得られる資源であるソーシャル・キャピタル (以下、SC) について、地域レベルの SC と高齢者の IADL 低下との関連を、3 年間縦断データのマルチレベル分析により検証した。</p> <p>【方法】日本老年学的評価研究 (JAGES) が 2010 年と 2013 年の 2 時点で実施した、24 市町村に在住する要介護認定を受けていない 65 歳以上を対象とした質問紙調査に回答した 92,272 名のデータを用いた。IADL の評価は、老研式活動能力指標 (以下、TMIG) の手段的自立 5 項目とし、4 点以下を IADL 低下と定義した。分析対象は、回答者が 50 名未満の小地域を除外した 380 小地域・58,683 名の回答者のうち、2010 年の SC もしくは IADL 項目に欠損があり、ADL および IADL 低下者を除外した 30,587 名とした。目的変数を 2013 年度の IADL 低下 (TMIG 4 点以下) としたマルチレベルロジスティック回帰分析を行った。説明変数は、個人レベルで評価した「ボランティア・スポーツクラブ・趣味の会の参加頻度 (月 1 回以上)」、「地域に対する信頼・愛着」、「助け合い」の平均値を地域レベルで集計し、因子分析により 3 つに集約した社会参加 SC、結束力 SC、助け合い SC とした。調整変数は、個人の SC、性、年齢、教育歴、婚姻状況、等価所得、抑うつ、治療中の病気の有無、飲酒、喫煙、歩行頻度、地域の可住地人口密度、平均等価所得とした。</p> <p>【結果】3 年間の追跡期間中に 2,886 人 (9.4%) に IADL 低下がみられ、調整変数を考慮しても地域レベルの社会参加 SC が 1 標準偏差高いと IADL 低下のリスクが 10%低かった (オッズ比[OR]: 0.90, 95%信頼区間[CI]: 0.84-0.96)。地域レベルの結束力 SC および助け合い SC と IADL 低下との間に関連はなかった (OR:1.04, 95%CI:0.97-1.13; OR:1.09, 95%CI:0.999-1.18)。</p> <p>【結論】社会参加が盛んな地域に居住している高齢者は、個人の要因を除外しても、3 年後の IADL 低下のリスクが低かった。</p>					
助成金の使用金額及び使途					
<ul style="list-style-type: none"> ・研究会参加・情報収集のための視察および学会参加のための交通費・宿泊費・参加費：70,000 円 ・研究成果発表のための交通費・宿泊費・参加費：55,000 円 ・英文校正：70,000 円 ・書籍、資料：55,000 円 ・HDD、USB 等：50,000 円 					
助成金を使用した成果に関する発表 (インターネットに公表されている場合は URL を記載すること。)					
英語原著論文とし、現在英文誌に投稿中である。また、研究の一部を第 77 回公衆衛生学会総会にて発表し、優秀ポスターを受賞した。					

